

障害者用駐車スペースと特別ニーズ対応区画を 市民はどのようにとらえているか

○西館有沙 (富山大学)
徳田克己 (子ども支援研究所)

水野智美 (筑波大学)

キーワード：障害者用駐車スペース，利用証制度，認識

はじめに

障害者用駐車スペースの適正利用を実現するために，自治体では利用証制度を導入する，広い区画幅を必要としない障害者等のための駐車スペース（以下，特別ニーズ対応区画）を新たに設置するといった対策をとっている。

こうした対策が効果を上げるために，市民の理解は欠かすことができない。そこで，利用証制度についての認知度や障害者用駐車スペース等に関する認識を調べ，今後の教育や啓発の内容や方法を検討することにした。

方 法

写真 1 の 2 種類の駐車スペースを利用証制度の適用区画と定めている地域に住む，自動車の運転歴がある 20 代から 50 代までの一般市民 595 名を対象とし，自記式・無記名式の質問紙調査を行った。回答済質問紙は 239 部を回収した（回収率 40%）。回答者の年齢は 20 代 83 名，30 代 52 名，40 代 83 名，50 代 21 名であった。調査の実施にあたり，2019 年 1 月に富山大学の研究倫理審査委員会（人を対象とし医療を目的としない研究倫理審査委員会）の承認を得た（人 30-18）。

結 果

居住地域に利用証制度があるかを 3 択で尋ねた（設問には制度の内容についての説明を付した）。回答項目は「ある」「ない」「わからない」の 3 択であった。制度があると答えたのは 20 代の 14%，30 代の 29%，40 代の 35%，50 代の 38%であり，20 代において有意に少なく，40 代に有意に多かった（ $\chi^2(6)=13.51$, $p<0.05$ ）。また，わからないと答えた者は 20 代(82%)において有意に多かった。年齢が上がるにつれて認知度は高まるものの，利用証制度の周知を図ることが，まずは課題であることがわかった。

障害者用駐車スペースを利用した経験の有無とその理由について尋ね，「他に空きがなかった」「少しの時間だった」「荷物が多かった」「建物近くに停めたかった」ことを理由に停めたケースを不正利用とし，その人数を計数した。不正利用経験のある者は 20 代 1 名，30 代 6 名，40 代 8 名，50 代 2 名であり，全体（239 名）の 7%であった。

特別ニーズ対応区画は整備が始まったばかりであり，障害者用駐車スペースと比べてその数は少ない。この区画の複数の例を写真で示し，この区画を見たことがあるかを尋ねたところ，見たこと

のある者は 20 代の 42%，30 代の 73%，40 代の 73%，50 代の 62%であり，20 代において有意に少なかった（ $\chi^2(3)=21.04$, $p<0.01$ ）。この区画を不正に利用した経験のある者は少数であった（全体で 6 名）。

障害者用駐車スペースをどのように利用すべきかを 3 択で尋ねたところ，年齢区分によって回答に有意差が認められた（ $\chi^2(6)=14.64$, $p<0.05$ ）。「駐車場が混雑していても，空けておくべきである」と答えた者は，20 代で 87%，30 代で 94%，40 代で 99%，50 代で 90%であり，20 代において有意に少なく，40 代に有意に多かった。また，「駐車場が混雑している場合には，誰でも停めてよいことにすべきである」とした者は 20 代の 12%，30 代の 4%，40 代の 1%，50 代の 5%であり，20 代に有意に多く，40 代で有意に少なかった。さらに，「駐車場の混雑具合に関係なく，誰でも停めてよいことにすべきである」（20 代 1%，30 代 0，40 代 0，50 代 5%）とした者は 50 代において有意に多かった。

特別ニーズ対応区画をどのように利用すべきだと思うかについては「駐車場が混雑していても，空けておくべきである」が 20 代の 70%，30 代の 88%，40 代の 88%，50 代の 76%であった。一方で，「駐車場が混雑している場合は，誰でも停めてよいことにすべきである」が 20 代では約 2 割，それ以外の年代でも約 1 割いた。年齢区分による回答の差は認められなかった（ $\chi^2(6)=11.50$, $n.s.$ ）。障害者用駐車スペースと比べると，混雑していれば停めてもよいと考える者が多い傾向にあった。



写真 1. 障害者用駐車スペース（左）と特別ニーズ対応区画（右）